

地水火風

恒一 牧野

お盆の前後から続いている広島土砂災害で、被災地の方は大変な苦勞をされている。

今年の夏、東京地方は異常な暑さに見舞われたが、一方で台風12号と11号が日本本土に相次いで接近・上陸し、その余波で日本列島はところにより異常な集中豪雨に襲われた。日本付近に停滞している前線に向かって、暖かく湿った空気が継続的に流れ込んだのが原因だというのが、8月にこれだけ長期間、列島各地で大きな被害が出たのは記憶にない。この豪雨を気象庁は「平成26年8月豪雨」と名付けて、その理由を探っているようだ。

本稿では、この豪雨による災害について考えてみたい。

「台風12号と11号関係の豪雨と被害」
台風12号と11号関係の豪雨と災害の状況は以下のとおりである。

「台風12号と11号関係の豪雨と被害」
台風12号と11号関係の豪雨と災害の状況は以下のとおりである。

まず、台風12号は7月30日3時に発生し、31日から8月1日にかけて沖縄本島地方に最も接近したのち東シナ海を北上して、4日3時に黄海で熱帯低気圧に変わった。

7月30日頃から北日本や西日本で雨が多くなり、特に四国地方では、7日0時から雨量が1000ミリを超え、また、三重県では記録的な大雨となり、9日17時20分から10日15時50分まで、三重県に対し大雨特別警報が発表されている。

前線や南からの暖かく湿った空気の影響で、8月5日夜から中国地方や東北地方で大雨となり、特に山口県では、局地的に1時間に100ミリを超える猛烈な雨が降った。

また、7月29日に発生した台風第11号は、ゆっくると北上し、10日6時過ぎ、強い勢力を保ったまま高知県安芸市付近に上陸。その後、次第に速度を上げながら四国・近畿地方を通過し日本海を北上、11日9時に温帯低気圧に変わった。

8月1日から18日まで、愛知、和歌山、島根、山口、徳島の各県で合計6人の方が亡くなり、重軽傷者88人、家屋の全半壊20戸、床上浸水1562戸などとなっている。

8月15日からの大雨に続き、8月15日から17日にかけて、本州付近に前線が停滞し、前線に向かって南から暖かく湿った空気が流れ込んだ影響で、東

日本と西日本では広い範囲で大気の状態が非常に不安定となった。局地的に雷を伴って非常に激しい雨が降り、16日と17日の2日間に降った雨の量が、京都府福知山市や岐阜県高山市等で観測史上1位を更新する等、近畿、北陸、東海地

方を中心に大雨となつた。この大雨で、石川、京都、兵庫の各府県で計4人の方が亡くなり、重軽傷者3人、家屋の全半壊30、床上浸水349戸などが出た。この雨では兵庫県の被害が特に大きく、京都府でも相当な被害が出ている。

「広島土砂災害と土石流」
19日になると前線は日本海に北上。この停滞する前線に向けて19日夜から20日未明にかけて暖かく湿った空気が流れ込んで、広島市を中心に局地的な豪雨をもたらした。

広島市安佐北区三入で、1時間降雨量の日最大値101.1ミリ、3時間降水量の日最大値217.7ミリ、24時間降水量の日最大値257.7ミリを観測した。

このため、広島市安佐南区と安佐北区の複数箇所で大規模な土砂災害が発生し、死者72人、行方不明者2人、建物全半壊65戸、床上浸水76戸など大惨事になった。

安佐北区の災害現場では、消防職員が住民の避難誘導中、土砂が再崩落し巻き込まれて死亡するという痛ましい二次災害も発生している。住宅地が大規模な土石

平成26年8月豪雨

流に飲み込まれたため、土砂の下敷きになった人の確認が難しく、当初は多数の行方不明者がいたが、消防、警察、自衛隊などの長期間の捜索で、行方不明者もあと二人を残すまでになった。一刻も早く発見されることを祈りたい。

「礼文島でも」
広島のと、今度は北海道の礼文島で、異常豪雨が降って死者が出て流による死者数は突出している。23日から24日にかけて、日本海北部の低気圧が北海道付近に近づいた後動きが遅くなり、一方上空には寒気が入り大気の状態が非常に不安定となったため、宗谷北部や利尻・礼文を中心に23日夜から局地的に激しい雨が降り、礼文町香深

土砂災害による被害として、2013年10月16日に発生した台風26号による東京都大島町の豪雨災害が思い出される。あの時の死者・行方不明者数は39人だった。1993年8月に鹿児島市で48人の方が犠牲になっているのが、平成以降の記録。23日から24日にかけて、利尻富士町と礼文町では、50年に一度の大値である。

実は、広島では過去にも同様の土砂災害が発生している。1999年に発生した「6・29豪雨災害」では、1時間雨量40ミリから70ミリの猛烈な雨が続き、広島市安佐北区などで今回と全く同じような斜面崩壊と土石流が発生して住宅地が飲み込まれ、死者31人、行方不明者2人を出している。この災害を契機として「土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律(土砂災害防止法)」が制定された。

この法律は「土砂災害が発生するおそれがある土地の区域を明らかにし、当該区域における警戒避難体制の整備を図るとともに、著しい土砂災害が発生するおそれがある土地の区域において一定の開発行為を制限し、建築物の構造の規制に関する所要の措置を定めるほか、重大な土砂災害の急迫した危険がある場合において避難に資する情報を提供すること等により、土砂災害の防止のため対策の推進を図り、もって公共の福祉の確保に資することを目的とする。」(第一条)とされて

いるが、広島県における土砂災害危険箇所数は全国1位だ。広島に住むということは、これらの危険地域が身近に存在することを考慮しなければならぬ、ということである。どこが危険で、どこなら危険が少ないのか、詳細なマップが作成され、それに基づいて街作りがなされなければならない。危険な地域では、宅地開発が規制されるのは当然だろう。

「リスクは自ら回避」
広島市は狭いデルタ平野から直接山地に続く地形が多いが、この山地は花崗岩が風化した「まさ土」が岩盤を覆い、その上に薄い表土が乗っているため、大雨が降ると斜面崩壊や土石流が発生しやすい。

それにもかかわらず、広島市や呉市は平地が少ないために山地部まで宅地開発が広がっており、土砂災害に対して危険な住宅地が多い。鹿児島市、長崎市、神戸市等も同様に、様々な情報を利用して自分で考える必要がある。その気になれば、ネット上には素晴らしい情報が溢れている。賢く利用したいものだ。

土砂災害危険箇所や急傾斜地崩壊危険箇所の数は共に全国1位だ。広島に住むということは、これらの危険地域が身近に存在することを考慮しなければならぬ、ということである。どこが危険で、どこなら危険が少ないのか、詳細なマップが作成され、それに基づいて街作りがなされなければならない。危険な地域では、宅地開発が規制されるのは当然だろう。

土砂災害による被害として、2013年10月16日に発生した台風26号による東京都大島町の豪雨災害が思い出される。あの時の死者・行方不明者数は39人だった。1993年8月に鹿児島市で48人の方が犠牲になっているのが、平成以降の記録。23日から24日にかけて、利尻富士町と礼文町では、50年に一度の大値である。

実は、広島では過去にも同様の土砂災害が発生している。1999年に発生した「6・29豪雨災害」では、1時間雨量40ミリから70ミリの猛烈な雨が続き、広島市安佐北区などで今回と全く同じような斜面崩壊と土石流が発生して住宅地が飲み込まれ、死者31人、行方不明者2人を出している。この災害を契機として「土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律(土砂災害防止法)」が制定された。

この法律は「土砂災害が発生するおそれがある土地の区域を明らかにし、当該区域における警戒避難体制の整備を図るとともに、著しい土砂災害が発生するおそれがある土地の区域において一定の開発行為を制限し、建築物の構造の規制に関する所要の措置を定めるほか、重大な土砂災害の急迫した危険がある場合において避難に資する情報を提供すること等により、土砂災害の防止のため対策の推進を図り、もって公共の福祉の確保に資することを目的とする。」(第一条)とされて

土砂災害危険箇所や急傾斜地崩壊危険箇所の数は共に全国1位だ。広島に住むということは、これらの危険地域が身近に存在することを考慮しなければならぬ、ということである。どこが危険で、どこなら危険が少ないのか、詳細なマップが作成され、それに基づいて街作りがなされなければならない。危険な地域では、宅地開発が規制されるのは当然だろう。

土砂災害による被害として、2013年10月16日に発生した台風26号による東京都大島町の豪雨災害が思い出される。あの時の死者・行方不明者数は39人だった。1993年8月に鹿児島市で48人の方が犠牲になっているのが、平成以降の記録。23日から24日にかけて、利尻富士町と礼文町では、50年に一度の大値である。

実は、広島では過去にも同様の土砂災害が発生している。1999年に発生した「6・29豪雨災害」では、1時間雨量40ミリから70ミリの猛烈な雨が続き、広島市安佐北区などで今回と全く同じような斜面崩壊と土石流が発生して住宅地が飲み込まれ、死者31人、行方不明者2人を出している。この災害を契機として「土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律(土砂災害防止法)」が制定された。

この法律は「土砂災害が発生するおそれがある土地の区域を明らかにし、当該区域における警戒避難体制の整備を図るとともに、著しい土砂災害が発生するおそれがある土地の区域において一定の開発行為を制限し、建築物の構造の規制に関する所要の措置を定めるほか、重大な土砂災害の急迫した危険がある場合において避難に資する情報を提供すること等により、土砂災害の防止のため対策の推進を図り、もって公共の福祉の確保に資することを目的とする。」(第一条)とされて

いるが、広島県における土砂災害危険箇所数は全国1位だ。広島に住むということは、これらの危険地域が身近に存在することを考慮しなければならぬ、ということである。どこが危険で、どこなら危険が少ないのか、詳細なマップが作成され、それに基づいて街作りがなされなければならない。危険な地域では、宅地開発が規制されるのは当然だろう。

土砂災害による被害として、2013年10月16日に発生した台風26号による東京都大島町の豪雨災害が思い出される。あの時の死者・行方不明者数は39人だった。1993年8月に鹿児島市で48人の方が犠牲になっているのが、平成以降の記録。23日から24日にかけて、利尻富士町と礼文町では、50年に一度の大値である。